

2025年9月1日

中国人虐殺102年・

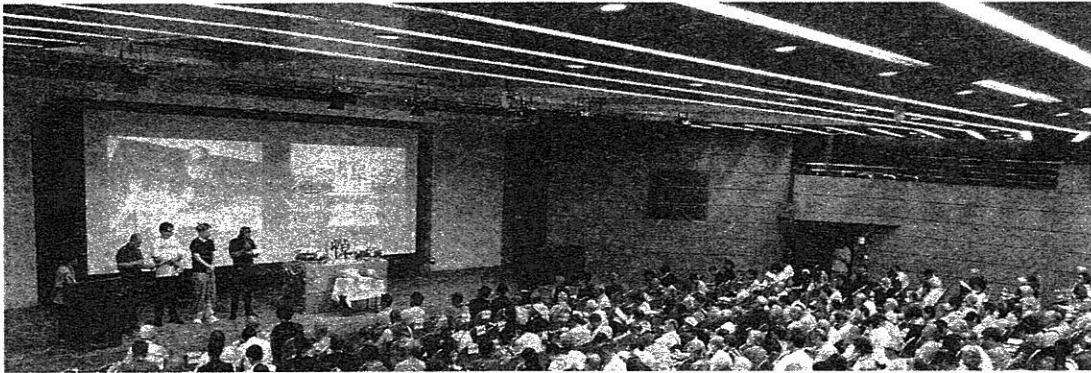
中国人受難者追悼式

中国人虐殺を考える集い

資料

主催：関東大震災中国人受難者を追悼する会

2025年8月31日午後 明治大学リバティールホール満員の参加者へ訴える遺族聯誼会（準）



2025年9月1日中国人受難者追悼式次第(6時30分～7時30分)

開式

黙祷 献花・遺族3名で

王旗さんのメッセージ(代読)

周松権さん発言

邱煜峰さん発言

陳興斧さん発言

中国大使館 王琳公使参事官ご挨拶

議員挨拶

福島みずほ参議院議員

まにわ尚之江東区議会議員

杉尾秀哉参議院議員メッセージ

石垣のりこ参議院議員メッセージ

酒井なつみ衆議院議員メッセージ

閉式

休憩

中国人虐殺を考える集い(7時50分～9時)

吉林電視台制作 DVD「王希天烈士と死難労働者に捧げる」抜粋上映

陳善慶さんの妻「おねえさん」の人生に民衆の国際主義を見る・・・林伯耀、陳興斧

特別アピール：眼前の戦争を阻止しよう・・・木野村間一郎

閉会の挨拶

歴史の記憶をもって、今の平和を守ろう
真実への執念をもって、
よりよき未来を切り拓こう
願わくば、私たちの子孫がもはや痛みを
受け継ぐことなく、
ただ生命への尊重と平和への深い価値を
受け継ぎますように

※終了後、会場から徒歩5分の「長春」で交流会



血は千峰に洒ぎ 秋葉を丹に染む

——祖父・王希天烈士殉難 102 周年に寄せて

王旗

本年は、偉大なる中国人民の抗日戦争および世界反ファシズム戦争勝利 80 周年であり、また同時に、祖父・王希天烈士が日本にて殉難してから 102 周年にあたります。

いまこの時、1923 年 9 月、祖父が熱血を異国の大地に洒い尽くしたことを追憶し、彼が国家の尊厳と華工（中国人労働者）の権益のために命を捧げた偉大さ、壮烈さをあらためて深く感じます。その英名と功績は、永遠に中華民族により語り継がれることでしょう。

二十世紀初頭の中国を振り返れば、国土は塗炭の苦しみに沈み、風雨にさらされていました。多くの中国の志士が救国存亡のために異郷へ赴き、民族復興の真理を模索しました。祖父・王希天もまた、その中の傑出した愛国志士、学生運動の先駆者、そして華工の指導者でした。

1914 年秋、18 歳の祖父は「中国を改造する大志」を抱き、ただ一人日本に留学しました。彼はこう語っています。

「われらの運命は、自ら切り開くものだ。冒険し、創造せねばならぬ……さもなくば必ずや失敗する。」

「己の責任を果たして受ける辱めにこそ、限らない喜びがある。」

「多く行動し、少なく語れ。実行を重ね、空談を避けよ。」

1917 年、祖父は周恩来ら留日学生と共に「留日学生請願団」を組織し帰国。北京や天津で「愛国拒約運動」を展開し、のちの「五四運動」の先声となりました。再び日本に戻ってからは、工学から法学に転じ、志を同じくする人々と交流し、義を見ては勇を奮い、華工の利益のために奔走しました。

1922 年 4 月、祖父は「同胞の救済に尽くす」を使命として「在日中華労働同胞共済会」を創立。華工の賃金未払いを糾弾し、日本人親方による搾取を禁じさせ、暴行の野蛮行為を糾し平等な待遇を求めました。さらに日本の進歩人士や在日中国公使を動員し、日本政府に対して禁令や追放令の撤廃を交渉。華僑の労働と商業の権利を守ろうとしました。とりわけ浙江省温州や処州（現・麗水）出身の華工たちは、祖父らの組織のもとで日本の政府・資本家・親方らと不屈の闘いを繰り広げ、その虐待や圧迫を一定抑えることに成功しました。

しかし、こうした活動により日本の軍国主義者は祖父を深く憎悪しました。彼は拒約運動の中核でもあったため、名古屋警察局は東京当局の命で「排日の巨魁」として嚴重に監視し、報復の機会を狙っていました。

1923 年 9 月 1 日、関東大震災が発生。日本の極端主義者は多数の華工を虐殺し、温州出身だけで 600 余名、数千の華工が収容所に押し込められました。祖父は同胞を憂い、

大きな民族的責任感をもって単身大島町へ赴き、暴行を告発し、正義を訴えようとした。ところが9月9日、調査と慰問の途上で憲兵に捕らえられ、9月11日深夜、日本の戒厳部隊長官が処刑命令を下しました。

9月12日未明、垣内八洲夫という刽子手（かいししゅ）が暗闇から軍刀を振り下ろし、祖父の背を斬り裂きました。鮮血が迸り、祖父は地に倒れました。その後、顔は潰され、手足は断ち切られ、遺体は逆井橋下の中川河へ投げ捨てられました。享年27歳、若き命は無惨に絶たれたのです。この場面は、何と痛ましくも壮烈なことでしょう。

祖父・王希天の短い生涯は、反帝反封建の色彩と民主革命の志に満ち、民族の独立と天下興亡を己の責任とする愛国の情熱に貫かれていました。その精神は燦然と輝く愛国主義の碑となり、中国人民の思想覚醒を照らす灯火となり、民族のたゆまぬ奮闘を導く不朽の伝説となったのです。

殉難の報は世を震撼させ、各地で盛大な追悼・記念大会が催されました。温州華蓋山には「吉林義士王希天君記念碑」が建てられ、吉林には「希天医院」が創設されました。

中国人民の抗日戦争勝利（1931-1945）は、民族独立への意志を決定的に固め、中国の復興と再生の新たな歴史を開きました。周恩来総理は「王希天は強烈な愛国心を持つ人物」と高く評価し、1973年には国務院も「革命のために日本で英勇に犠牲となった」と証明しました。長春には陵園と記念館が建立され、祖父の霊を慰めています。

さらに、日本の多くの民間友好人士も歴史を正しく見つめ、深く反省する姿勢を示しました。今井清一、石井良子、仁木富美子、宮武剛、田原洋、遠藤三郎、大田堯、山住正己、及田一夫らは中日を往来し、調査研究を重ね、日本軍国主義の残虐行為と王希天烈士殉難の真相を明らかにしました。教育界の知識人ら1万6千名が募金し、温州華蓋山に王希天義士記念碑を再建しました。その碑文には「この尊い犠牲が人々の心に教訓を残し、永遠に平和を追求することを願う」と刻まれています。

「繁霜尽是心頭の血、洒ぎて千峰秋葉を丹にす。」

まさにこの時、我々は祖父・王希天烈士と在日華工の反帝反封建の選択を偲び、その短くも輝かしい生涯を追憶します。最も大切なのは、彼らの勇敢な闘争精神と国を憂い民を思う赤子の心を発揚することです。歴史の経験と教訓を記憶するのは、憎しみを継続するためではなく、人々に平和への希求と堅持を呼び覚まし、過去を鑑み未来を開き、中日両国人民が世代を超えて友好を育み、世界の人々が永遠に平和と安寧を享受するためなのです。

王希天烈士の英姿は永遠に存す！

在日殉難華工の徳望は長く昭らかに！

中日両国人民の世々代々の友好を願う！

中文標題は「血洒千峰秋叶丹」であり、以下の注書きが添えられている

其意引自明代抗倭名将戚继光《望阙台》中“繁霜尽是心头血，洒向千峰秋叶丹。”

「東瀛惨案」および王希天烈士殉難 102 周年記念式典挨拶文

ご来賓の皆様、遺族の同胞の皆様、日本の友人の皆様、親愛なる友人の皆様：

本日、私たちは重くも揺るぎない思いを胸に、「東瀛惨案」発生 102 周年を迎え、この場に集まりました。1923 年の関東大震災後、日本軍国主義の暴徒によって残虐に殺害された 700 余名の中国人劳工同胞、6000 余名の朝鮮人、そして惨案の真相を究明しようとして不幸にも犠牲となった王希天烈士を追悼いたします。

102 年前のあの惨劇は、天災に伴う偶発的な出来事ではなく、周到に計画され、組織的に行われた露骨な大虐殺でありました。

日本軍国主義の暴徒が無辜の異国民に刃を振るった卑劣な行為は、今なお私たちを痛ませ、憤りを呼び起こします。この歴史は私たちの血脈に深く刻まれ、いかなる隠蔽や改ざんも許されません。

歴史を振り返れば、私たちは真相を追究する歩みを一度も止めたことはありません。2013 年以来、遺族による権利擁護と追悼活動は温州と日本の両地で継続的に行われてきました。温州では累計約 40 回の活動が開催され、会議から学術討論に至るまで、その一つひとつに私たちの真相への執念が凝縮されています。私たちは 8 度訪日し、虐殺の地で追悼式を行い、2014 年には請願書を、2015 年には要請書を提出し、繰り返し日本政府に遺族の訴えと非難を伝えました。3 年間のパンデミック期間でさえ、私たちは記念を絶やさず、オンライン活動へと切り替え、この信念を貫いてきました。

特筆すべきは、林伯耀氏を代表とする在日華僑華人の皆様、田中宏氏を代表とする良心ある日本の友人たちが、常に私たちと共に歩んでくださったことです。彼らは中日両国を奔走し、証拠を収集し、交渉を支援し、行動をもって歴史の真相を明らかにするために尽力されました。また、中国駐日大使館も常に力強い支援を与えてくださり、昨年の東京追悼式では公使が臨席して演説し、「歴史は忘れてはならず、ましてや隠蔽や改ざんされてはならない」と強調しました。この祖国からの支えは、私たちが歩みを進めるうえでの大きな力です。

特に注目すべきは、2023 年 6 月 15 日、社民党党首・福島瑞穂氏の質問により、日本政府がついに「三つの承認」を行ったことです。すなわち、「東瀛惨案」に関する調査報告資料と 1924 年内閣賠償方案資料が外務省に保存されていること、そして 2014 年に私たちの請願書を受理したことを承認したのです。しかし、私たちは冷静に認識しなければなりません。「承認」は出発点にすぎず、決して終点ではありません。1924 年、日本政府が圧力の下で策定した賠償方案は 102 年間一度も実行されず、犠牲者から没収された金品もいまだ遺族に返還されていません。この歴

史に対する謝罪も、長きにわたり届いておりません。102年の間、世代を超えた遺族が返答を待ち続けましたが、歴代の日本政府から誠意ある対応は一度もありませんでした。この回避と引き延ばしは、歴史を裏切り、良心を裏切るものです。

本日、102周年の節目に立ち、私たちは遺族として改めて日本政府に強く要請します。これらの訴えは一度も変わることなく、今後も揺らぐことはありません。

1. 日本政府は国家としての責任を負い、「東瀛惨案」の歴史的事実を認め、1923年に虐殺された中国人犠牲者とその遺族に正式に謝罪すること。
2. 1924年に貴国政府内閣が決定した賠償方針に基づき、現行の国際慣例、物価水準及び犠牲者数を考慮し、直ちに賠償を実施すること。
3. 歴史を鑑とし後世に警鐘を鳴らすため、犠牲地に記念碑を建立し、中国人及び朝鮮人が虐殺された歴史を伝える記念館を建設すること。
4. 「東瀛惨案」の真実の歴史を日本の歴史教科書に記載し、日本の若い世代にこの過去を知らせ、そこから教訓を得て悲劇の再発を防ぐこと。
5. 当時犠牲者から没収した金品を直ちに返還し、その遺族に引き渡すこと。さらに毎年9月、遺族代表を招待し追悼活動を共にを行い、政府代表を派遣して挨拶を行うこと。

日本はしばしば「礼儀を重んじる国」と称されますが、政府の信用の核心は、既に約束されたことを履行するかどうかにかかっています。1924年の賠償方案は貴国政府の約束であり、102年間履行されなかった債務は、もはや清算されるべきです。私たちは次の10年、次の百年を待ちたくありません。日本政府が責任を持ち、回避や引き延ばしをやめ、歴史的責任を直視し、私たちの正当な訴えに誠意ある回答を示すことを期待します。

同時に、私たちは広く社会各界に呼びかけます。日本社会の皆様には遺族活動を支援し、社会的寄付を通じて歴史の真相の普及にご協力いただきたいと思います。メディアの友人の皆様には、「東瀛惨案」をより多く報道し、広く社会に知らしめていただきたいと思います。朝鮮族の同胞の皆様には、私たちと交流を深め、相互理解を強めていただきたいと思います。かつて共に苦難を経験した私たちは、今こそ手を携えて正義を追求すべきです。

友人の皆様、私たちが幾度も歴史を振り返るのは、憎しみを引き継ぐためではなく、歴史を鑑として未来に向かうためです。102年という歳月は記憶を曖昧にするかもしれませんが、同胞の血と烈士の犠牲は、常に私たちに呼びかけています。歴史の真相を守ることこそが悲劇の再発を防ぎ、責任を果たすことこそが真の和解へと導くのです。今年は中国人民抗日戦争および世界反ファシズム戦争勝利80周年にあ

たります。私たちがこの偉大な勝利を記念するのは、歴史を銘記し、先烈を追悼すると同時に、全世界に示すためです。すなわち、歴史の真相を追求する私たちの執念と、正義を守り抜く不屈の信念をです。私たちは信じています。正義の力に導かれ、歴史の債務は必ず清算され、同胞の冤屈は必ず雪がれることを！

最後に、犠牲となった同胞と王希天烈士を改めて追悼し、私たちの不屈の努力が正義の実現へと結びつくことを願います。必ずや歴史の債務は清算され、同胞の冤屈は雪がれる日が訪れると信じます！ご清聴ありがとうございました。

「東瀛惨案」中国遺族連合会

2025年9月1日

2025・9・1 東京新聞

虐殺「どう向き合うのか」

犠牲者を悼み献花する韓国と中国からの遺族＝31日、東京都千代田区で



千代田 犠牲者追悼集会

関東大震災直後に虐殺された朝鮮人や中国人を追悼する集会が31日、東京都千代田区の明治大リパティタ

ワー1階リパティホールであった。約500人が集まり、犠牲者に黙とうをささげるとともに、日本政府に

対し、公式に事実を認めるよう求めた。

韓国や中国から犠牲者の遺族ら4人が訪れ献花した。祖父の兄が虐殺で亡くなったという韓国の遺族は「今も日本政府は反省がない。遺体を捜し出して埋葬するのが遺族の道理。遺骨を捜したい」と訴えた。中国からの遺族も「日本人に虐殺された。自然災害ではなく人災」と強調した。

主催者あいさつで田中宏一橋大名誉教授は、排外主義的な主張が広まる昨今の風潮に「過去とどう向き合うか重要な時期。一緒に考えていければ」と語った。追悼は1日以降、各地で催され1日は墨田区の横綱町公園で朝鮮人犠牲者の追悼式典があるほか、6日には同区の荒川河川敷で、旧四ツ木橋で虐殺された人たちの追悼式もある。（神谷円香）

歴史の痛みを胸に 平和の志を刻む

皆さま、こんにちは。邱煜峰と申します。

本日、私がここに立っているのは、単なる語り手としてではなく、家族の記憶に深く刻まれた傷を受け継ぐ者としてです。私の高祖父・邱国蓮は、1923年の関東大震災後に起きた、あの恐るべき惨劇の中で、無実のまま命を奪われました。彼の命を終わらせたのは天災ではなく、日本の軍国主義思想に裏打ちされた軍や警察の狂気と残虐行為でした。

あの地震は自然災害でした。しかしその直後に起きたのは、在日中国人労働者、華僑、留学生に対する組織的かつ計画的な大虐殺でした。流言飛語が刃となり、偏見が共犯となり、そして人命を軽視する軍国主義思想こそが、すべての暴行の根源でした。私の家族の記憶には、そのために癒えることのない深い傷が残りました。私たちの悲しみは、親族を失った哀悼だけではなく、その暴行が意図的に隠され、歴史が消し去られようとしてきたことへの怒りでもあります。しかも当時、日本の内閣が賠償を決定していたにもかかわらず、その後の中日関係の問題により実現されず、今なお歴史の懸案として残されています。

軍国主義思想——それは人間性を歪め、憎悪を煽り、武力を崇拜させる毒瘤です。かつてそれは日本を戦争の奈落へと引きずり込み、アジア諸国の人々、そして日本国民自身にも計り知れない惨禍をもたらしました。善良な庶民を殺戮者へと変え、文明の国を狂気へと陥れました。関東大震災後の惨劇は、この毒瘤の初期の発作であり、その後の侵略の道における、さらに惨絶な罪行を予告していたのです。

歴史はやり直すことができません。しかし忘却してはならない。忘却は犠牲者への二度目の傷となります。私たちは問い続け、語り続けねばなりません。それは憎しみを永続させるためではなく、真実を明らかにし、人間の尊厳と良心を守るためです。歴史の暗闇に正面から向き合うとき、初めて過ちを繰り返さずに済むのです。

だからこそ、私たちが糾弾するのは罪深き軍国主義思想そのものであり、一つの民族そのものではありません。私たちは深く理解しています。平和と発展こそが人類の大道であり、中日両国民をはじめ全世界の人々の共通の願いであることを。真の勇気とは歴史を直視することであり、真の強さとは平和と正義と善良を守ることにあります。

私たちは日本政府に呼びかけます。歴史に対する責任を担い、当時の内閣決定による賠償を再び動かし、懸案を解決し、歴史に終止符を打ってください。私たちは世界に呼びかけます。国籍や民族を問わず、この痛ましい歴史から深い教訓を汲み取るべきです。いかなる形態の軍国主義も、極端な民族主義も、人類共通の敵であり、その復活を防ぐために最大限の警戒を払わなければなりません。

歴史の記憶をもって、今の平和を守りましょう。真実への執念をもって、よりよき未来を切り拓きましょう。

願わくば、私たちが永遠に平和を享受できますように。

願わくば、私たちの子孫がもはや痛みを受け継ぐことなく、ただ生命への尊重と平和への深い価値を受け継ぎますように。ご清聴、ありがとうございました。

本年は「東瀛惨案」（関東大震災時の中国人・朝鮮人虐殺事件）から 102 周年にあたります。私は、関東大震災において虐殺された中国人労働者福建福清遺族聯誼会（準備会）を代表し、無惨にも命を奪われた中国人同胞および朝鮮人犠牲者の方々に深い哀悼の意を表します。また、長年にわたり追悼活動を継続し、歴史の真実を伝え続けてこられた日本の有識者各位、並びに在日華僑の皆様にご心より敬意と感謝を申し上げます。

今から 100 年以上前の関東大震災において、近 800 名の在日中国人労働者と 6,000 名を超える在日朝鮮人が、大自然による震災は生き延びたものの、最終的には日本の軍警や軍国主義的暴徒による残虐な虐殺という「人災」によって命を奪われました。これは世界を震撼させた「東瀛惨案」であります。本日私たちはここに集い、この痛ましくも忘れてはならない歴史を共に追悼いたします。そこは血と涙が交錯した場であり、数え切れぬ命が奪われ、家庭が破壊され、人々が深い悲嘆に沈んだのです。

福建省福清出身の劳工被害者がいました。名は陳善慶。彼は日本人女性と結婚し、一男一女をもうけ、本来は幸せな家庭を築いていました。しかし、この大虐殺の中で、現在台湾の檔案館に保存されている『関東大震災で虐殺された中国人名簿』には陳善慶の名が記され、当時の目撃者や証人の証言によれば、「青年団に殴打され瀕死の目に遭った」とされています。陳善慶は実際には死んでいませんでした。彼は暴徒により四肢を折られ、全身傷だらけですでに意識不明の状態でした。その後の彼の回想によれば、瀕死の彼を救い出したのは、知らせを聞いて駆けつけ、命懸けで死体の山の中から彼を見つけ出した日本人妻でした。陳善慶は死ななかったのです！彼は生き延びたのです！

しかし、命からがら生き延びた陳善慶は、重度の障害を負った身体となってしまいました。その後、陳善慶はこのまま日本におればきっと殺されると考え、何としても故郷の福建福清に帰りたいと強く求めました、優しい妻は彼の願いを実現してあげようと毅然と決意しました、そして遂に、夫の陳善慶と幼い一男一女を連れて、彼女には言葉の通じない夫の故郷へ連れて帰りました。横浜港から上海に船でわたり、更に上海から福建の馬尾港までまた船に乗り、更に馬尾から 200 キロも離れた福清迄を陸路か海路で連れて帰りました。きっと私達の想像できない多くの困難や苦労に遭遇したに違いありません。彼女は村の人にもとても優しく、その内に福清の田舎の言葉を覚えるようになりました。しかし陳善慶の日本人妻の本当の名前は誰も知りません。村の人々は、陳善慶に倣って彼女を「乃桑（ネエサン）」と呼んでいました（方言による呼称）。彼の息子は「陳興仁」と名付けられ、陳善慶は彼を「飛弟朵（ヒデト）」と呼んでいました。娘は「阿南ちゃん」と呼ばれていました。

陳善慶一家が日本から中国の故郷に戻った後、彼は生涯にわたる重度の障害を負い、腕は大きく曲がり、両手は後ろに反り返り、両脚は不自由となり、生涯にわたり労働能力を失いました。家族の生活は万劫不復の困窮に陥り、極度の貧しさの中で、一年を通じて親族の施しや野草を掘って飢えをしのぐしかありませんでした。

労働能力を失った陳善慶の生活はますます困窮し、まず幼い娘を「童養媳」として人に売り渡し、次に唯一の息子を金銭のために壮丁（兵役要員）の身代わりとして差し出しました（後に病死したとの伝言が残っています）。その後も飢饉に遭い、祖先から受け継いだ家屋や田地を次々と売り払いました。子どもと財産をすべて失った陳善慶は、ついに追い詰められて故郷を離れ、物乞いをしながら福建省の省都・福州へと流れ着きました。やがて消息を知る者の証言によれば、彼はその後、あるスラム地区の便所で首を吊り自ら命を絶ったといひます。

陳善慶が家を出奔した後、妻の生活はさらに困難を極め、日々をしのぐこともできず、ただ野菜や野草を掘って食いつなぐしかありませんでした。陳善慶が出て行った翌年、彼女は飢えと寒さの中でついに衰弱し、餓死しました。陳善慶の妻、陳善慶と生涯を共にしたこの日

本人女性は亡くなりました。彼女は飢餓によって死に、貧困によって死に、そして日本の軍国主義が掘り下げた墓穴によって家族もろとも破滅させられたのです。その結末は、あまりにも痛ましく、あまりにも悲しいものでした。

陳善慶の日本人妻は、小柄な女性ですが、強い正義感を持った人でした。夫の陳善慶が捕らえられ、死に瀕するほどの暴行を受けたその場で、陳善慶と同じように捕らえられた朝鮮人や台湾人を、「これらの人は皆私の知人です。彼らを釈放してください」と強く抗議して彼らを釈放させたと聞きます。この日本人夫人は、私たちの村に来てからも村の人々にもとても親切でした。

今、彼女は頭を日本の方向に向けて、村の入口にある落花生畑に葬られています。私たちは彼女の本名を知りません。ただ「乃桑（ネエサン）」と呼ぶしかありません。私たち村の人々は、「乃桑（ネエサン）」の魂が日本の故郷へ帰れることを願っています。もし「乃桑（ネエサン）」の本名や故郷の住所をご存じの方がいれば、どうか教えてください。私たちは彼女の墓前に名前を刻んだ碑を立て、遺骨を「乃桑（ネエサン）」の故郷へ送り届けたいのです。歴史は決して忘れ去られてはなりません。悲劇は二度と繰り返してはなりません。私たちは日本政府に対し、歴史を直視し、国家としての責任を果たすことを強く求めます。すなわち、この痛ましい歴史的事実を認め、1924年に日本政府内閣が決定した賠償案を履行し、国際慣例に従って修正し、1923年関東大震災において虐殺された全ての中国人労働者およびその遺族に対して謝罪と賠償を行うべきであります。

1923年関東大震災時虐殺された中国人労働者福建遺族聯誼会（準）代表

陳興斧



日本政府の責任を追及するぞ！

2025.8.31